

平成 19 年度 全国盲学校弁論大会広島大会

〔中国・四国地区代表〕

「神様からの贈り物」

保健医療科 1 年 森島 春義（当時 48 歳）

私は網膜色素変性症という病気をもち、生まれてきました。唯一、大好きな野球はできませんでしたが、それ以外は何不自由なく生活していました。

中学校を卒業して、私は家業の花屋を次ぎました。仕事は市場へ行き花を仕入れたり、山に行って仕事をすることもありました。その頃の私の視力は 0.1 ぐらい、仕事はどれも厳しいことばかり。でも、こんな病気を持つ私でも、何事に対しても人よりまじめにしていれば、きっといいことがあると思い、一生懸命やりました。やってきました。

そんな私に、27 歳のとき転機が訪れました。ある女性と出会い、見えにくいために諦めていた結婚をし、2 年後には子供も授かり、子どもたちが小学校時代に私が好きな、好きな野球をしてくれたことで、充実した時期を過ごせるようになったのです。

そして、子どもたちの野球を通じて、大事な人との出会いもありました。それは、同じ野球チームのお子さんのお父さん、A さんとの出会いでした。A さんは私と同じ病気を持ち、盲学校の卒業生でした。A さんとは今でも、家族ぐるみのつきあいができています。

40 歳を過ぎて、私は白内障がひどくなり、去年の 1 月、手術をしました。が、期待もむなしく、治りませんでした。治らないとわかったときは、このまま生きるか、それとも自ら命を絶つか、どうしたらいいのかわからなくなりました。

その日の夜、A さんから電話がかかってきました。そして笑いながら、「森島さん、森島さんのことやから、変なこと考えてなからうな！50 歳、60 歳の自分のことを考えて、盲学校で勉強してみたら！」と勧めてくれました。

妻にも説得され、行くだけ行ってみようかと、去年の 2 月と 11 月に愛媛県立松山盲学校を訪れました。学校では先生の案内で、いろいろな授業を見せていただきました。パソコン教室も見せていただきました。パソコン教室を見たとき、私は妻に言いました。「お母さん、とってもやないけど無理！小学校、中学校でも勉強していないのに、中学校を卒業してからも勉強していないのに、ましてパソコンなんか…」

その言葉を学校の先生も聞いておられ、「いや、森島さん、心配なんかなくていいよ！最初からできる人はいないんだから！一つ一つ覚えていったらいいから！」とってくださいました。また、「森島さん、漢字が読めなくてふりがなをふって、一生懸命勉強して立派に卒業している人がいっぱいいますよ！」とも言ってくださいました。この言葉で、私はまた前を向くことができました。

入学を決意した私は、その日の夜から、勉強を始めました。

盲学校ではあん摩マッサージ指圧の勉強の他に、英語や数学もあると聞いたので、妻の勧めもあり、英語はABCを書く練習から始めました。数学は簡単な少数の計算から始めました。

勉強の最中、夫婦げんかをしたこともありました。「おれ、これ、中学で教えてもらったことないよ！」「お父さん、いい加減にしてよ！それは小学校の問題！」あまりの悔しさにお皿を割ったこともありました。

難しかったのはルートの問題です。わけがわからず考え込んでいると、子供が寄って来て、とんとんと肩をたたいて、声を掛けてくれました。「お父さん、また顔にしわ寄せて！何、考えとるの？あっ！これ、ルートの問題。おれ、これ好きなんよね！このルートの中の数字は変身しとるんよ！数字には仲間がいっぱいいるから、仲間の力を借りて変身を解いてやればいいんよ！」

目が悪いから勉強できない！目が悪いからそれができない！勉強していく中で、自分自身に壁を作り、今までいろいろなことをして来なかった自分に、私は気が付きました。

もし27歳のときに妻と出会わなかったら…、もし子供が野球をしなかったら…、もし盲学校内の案内をしてくれた先生に出会わなかったら…、そして、大事な大事なAさんと出会わなかったら…、私は盲学校の入試を受けることはなかったし、もちろん、この弁論大会に出場することもなかったでしょう。

私が生きていくために必要な人達との出会いや気づき、これこそ神様からの贈り物だと思っています。